大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

# 經濟論叢

第三十四卷　第五號

昭和七年五月一日發行

（禁轉載）

## 論叢

相續稅重課の大勢と其方法……法學博士　神戸正雄
貨幣の價値の受動性……文學博士　高田保馬
社會理念とイデオロギー及びユートピー及びミートトス……文學博士　米田庄太郎

## 研究

了解科學としての經濟學……法學士　山口正太郎
支那國民經濟序說……經濟學士　大上末廣
取引所組織の再吟味……經濟學士　今西庄次郎
燒津鰹漁業に於ける船仲組織……經濟學士　岡本清造

## 說苑

福岡藩の育子策について……經濟學博士　本庄榮治郎
貸借對照表分析の前提條件……經濟學士　小菅敏郎
連鎖店反對運動……經濟學士　谷口吉彦

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

研究

# 了解科學としての經濟學

山口正太郎

## 一

科學としての經濟學は如何なる性質をもつものであらうか、かつてリッカートが自然科學に對立したものとして文化科學を提唱してから、經濟學は一應は文化科學に屬するものと考へられた。假令普遍的文化科學と云ふ中間區域(Mittelgebiete)[1]を設定し生物學、社會學、經濟學等を此區域に包容せねばならぬと云ふ論理上の不徹底さがあり、非難の聲が此點に向けられたが[2]、經濟學が自然科學に屬するものでないと云ふ消極的主張は多くの人々によつて是認された處であつた。

乍然獨逸西南學派の人々の主張は方法論上から、價値關係の下に個別化的に取扱ふものが文化科學であつて、價値に無關係に普遍化的法則を樹立するものを自然科學として峻別する處に重點があり、謂はゞ方法的、形式的のものに過ぎない憾がある。從て數理派經濟學の如く自然科學的

1) Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, 3 Aufl., 1915. S. 114-128
2) Soda, Die logische Natur der Wirschaftsgesetze, 1911, S. 21.

方法を採る時は其本質の如何なるやを問はず、自然科學とならねばならない尤も。從來の科學分類論が對象に卽して爲されたがために、其處に多くの矛盾を生じたことは認められる。此點にリッカート等の方法論的峻別の功績は擧げられるけれども、之をもつてしては科學探求の形式は兎に角、本質による區別は得られない。

然らば科學の對象に卽するのでもなく、又方法によるのでもなく、專ら科學の本質に基いて經濟學の性質の如何なるものであるかを闡明するにはどうすればよいか、　獨逸理論經濟學界の最近の努力の一部は此方面に向けられてゐる如くである。

## 二

今茲に一つの經濟現象が出現したとする。例へば英吉利の金本位停止と云ふ一つの現象がある。之に對して經濟學の立場から我々の爲す處は何であるか、それは英吉利の金本位停止が如何なる意味をもつかを了解することである。我々は英吉利の金本位停止を感覺的に知覺することは出來ない。場所を離れたものは眼で視たり、手で觸れることを得ない。尤も我々は英吉利の金本位停止を新聞雜誌で讀む、乍然それは眼で視ると云ふ感覺的動作そのものではなく、それによつて意味を了解するのである。眼で視・手で觸れ得るものは物理現象である。經濟現象は感覺を離れ、意味を了解することによつて知り得られる。尤も物價騰貴と云ふ經濟現象は日々の消費財を通じて感覺的に知覺し得ると云ひ得やう。墺國心理學派の如く消費財の分量と欲望滿足の程度と

の相關々係を經濟學の中心問題とする時は物價騰貴による消費財分量の狹少は明瞭に知覺し得やう。乍然此事は必竟刺激と感覺との相關々係と云ふ精神物理現象の範圍を出ないのであつて物價騰貴を知ると云ふ事は感覺の世界の爲し得ることではない。感覺の世界に於ては與へられたる直接事物の外面を知ると云ふ以外に出ない。消費財の減少は知り得るがそれが物價騰貴に基くと云ふことは了解の世界の事である。

今眼前に賣買と云ふ經濟現象があるとする。一匹の馬が若干圓の貨幣と交換された。我々は逞しき一匹の馬と、貨幣の若干量とを視、且つ之が當事者双方の手に交換されたのを視る。乍然その限りに於ては物理上の現象たるに過ぎない。唯外面に表はれたる現象を感覺を通じて知るに過ぎない。然し此現象が經濟現象たるためには馬の逞しさに對し與へられたる貨幣量が僅少に過ぎないか、一般市場價格に比して此個別價格が低いではないか等の外部的物理現象以外の點に進まねばならぬ。此以外の點とは其賣買と云ふ現象の持つ意味である。廉價に手放したと云ふのは賣手が貨幣を得たいと云ふ窮迫した狀態にあつたがためで、從て市場價格よりも廉價であつたと云ふような其賣買現象のもつ意味を了解して初めて物理現象が經濟現象に轉んずるものと云ひ得よう。單に馬と貨幣との交換ならば之は物理現象の範圍を出ないのである。

經濟學は又單に時間的に現在に行はれた現象を取扱ふだけに止まらない。過去を取扱ひ未來を推測するであらう。時間の分子を容れる時は意味の了解が更に經濟學の本質を爲すことが明瞭と

なる。我々はマルクスを感覺的に知覺するを得ない。過去の人物たるマルクスを眼で視、その聲を耳で聽くことを得ない。唯マルクスのもつ意味を了解するだけである。マルクスを知るためにはマルクスの著述を讀む。それは明瞭に視覺を通じて知ることである。乍然書物を讀むと云ふ感覺的方法は單に手段であつてマルクスの持つ意味を知ることは眼で書物を讀むと云ふ感覺的動作によつて得られるものではない。感覺的に知り得ない過去の人物の持つ意味は之を了解する他に方法はない。過去を現在に於て了解するのであつて必竟歷史は此了解の範圍のものである。從て過去の、或は過去の人物の持つ意味は之を了解する時の如何によつて變化する。十年以前にマルクスの意味の了解されたものと現在に於ける了解とは著しく異る。意味の變化が時間を共に生じる。固定した物理現象と異る處は此處にもある。歷史が過去から現在に至るのでなく、現在から過去に溯るのだと云ひ、或は現在が過去を作ると云ふのは此意味であつて、過去の持つ意味が現在に於て了解され、其了解に從つて過去が變化されるのである。從つて過去の經濟現象は現在に於て了解され、了解の如何によつて其持つ意味が變更される。時間の分子を考慮に容れると經濟學の本質が意味の了解に存することが益々明瞭となるであらうと思ふ。

## 三

經濟學の本質が意味の了解(Verstehen)にあることは既にマックス、ウェーバー[1]の唱へる處であるが、更にゾムバルトは經濟學を三つに分類して各々のもつ特徵を述べ、了解經濟學が眞の經濟學

1) Max Weber, Wirtschaft und Gesellschaft. G. D. S. III. 1921, S. 1–11.

であることを主張した。彼によれば第一種の經濟學は指導的經濟學(Die richtende Nationalökonomie)でアリストテレスに初まり中世スコラ哲學が此跡を辿り、更に自然法的思想を有する啓蒙哲學に至る思想の發展、之に裏付られた經濟思想、殊にトマソ、ダキノのそれからケネーを創始者とする重農學派、アダム、ミュラーからシュパンに至る、浪曼派經濟學等が之に屬する。之等の經濟學に於ては中心となるのは當爲(Sollen)で常に一つの理想の下に經濟學が建設され、人々に斯く爲すべし、斯く爲すべからざるを敎へる。人類の經濟が正しき經濟たるべき指導方針を與へるものは經濟學である。乍然此「正しき」と云ふことは何であるか、それは此派によれば人類最高の目的の實現に關係したものである。此處に於て人類最高の目的とは何ぞやと再び質問せなければならない。此派にあつては唯之が當爲として無條件に與へられてゐるに過ぎない。人々は最大の生産力を發揮せねばならぬと云ふ、乍然何故の最大の生産力ぞと云へば此派は默して語らない。此派は從て經濟學を經驗に基く科學とするのでなく形而上學と爲すものである。[2]

第二種のものは自然科學的經濟學(Die ordnende Nationalökonomie)で近世科學の發達に應じた普遍概念及び法則を建設する方法を採るもので、英吉利正統學派、墺國學派、マルクス派經濟學及び近代的傾向たる相關主義等、之に屬する。然しゾムバルトによれば此種の經濟學は單に表面的に理路を追ひ、秩序づけるに過ぎない皮相的な科學的方法で、之を以ては外面的に經濟現象を把握するに止まつて、現象の本質を看過するものである。[3]

2) Sombart. Die drei Nationalökonomien, 1930, S. 82.
3) Sombart, a a. O. S. 139.

然らば果して如何なるものが眞の經濟學であるか、ゾムバルトによればそれは了解經濟學(Die verstehende Nationalökonomie)である。本來經濟學は自然科學に對立する精神科學である。此精神科學とは精神そのものを取扱ふ科學と云ふのではなく、現象を意味に於て理解する學問である。意味關係の闡明を目的とする科學である。意味に於て現象を解するとは外面的に現象を把握するのではなく、內面的に現象の有する意味を了解し、且つ現象間の意味の關聯を考究することである。尤も此意味の理解に達する手段として經濟學が自然科學的方法を採るも差支はない。然しそれは飽く迄手段として止まるので本質とはならない。例へば土地に收獲遞減の法則と云ふものがある。經濟學が之を利用するは差支がない。けれども此法則そのものに止まつて茲に經濟學の本質があるとするは誤である。此法則を手段として經濟現象の意味を把握せねばならぬ。[4]

ゾムバルトは經濟學を了解科學として建設せんと努力し縷々數千言に及んだ。然しそれは經濟學の本質が了解そのものにあることを力强く宣言したゞけで、然らば了解を本質として如何にして眞の經濟學が建設せらるゝかと云ふ積極的主張には甚だ物足りない。アモン敎授はゾムバルトの文章は力に滿ちてゐるが、科學は力を以て征服されないと云ひ、又科學の國は恐らく共和國であらう、此國に於ては力を以てする獨裁(Diktatur)は行使し得られないと批評してゐる。[5]

## 四、

抑も了解とは如何なることであるか、それは意味の把握(Sinnerfassen)であり本質認識(Wesens-

4) Sombart, a. a. O. S. 251.
5) Alfred Amonn, Wirtschaft, Wirtschaftwissenschaft und die drei Nationalökonomien. Schmollers Jahrbuch, Heft II, 1930.

erkenntnis) である。我々は了解し得る事のみを眞に深く認識し得る。而して眞に了解せられるものは、了解するものと同じ性質を持たねばならぬ。同じものは同じものによつてのみ本質を認識され得る。換言すれば精神は精神によつて (Geist durch Geist) のみ認識し得られる。[1] 尤も我々は事物の本質を認識する、此際は精神によつて事物そのものを認識すると考へられる。此故に精神が精神を了解する處の精神了解(Das Seelverstehen)と區別して之を物的了解(Das Sachverstehen)と一應、別ち得るやうであるが、然し了解し得られるものは事物そのものではなくて、その事物の持つ意味でなければならぬ。單に事物を認識すると云ふだけでは事物の外面を知るに過ぎない。其内面、本質を認識するにはその事物の持つ意味を把握することでなければならぬ。從て事物の認識は事物なる形態を通じて意味を了解することであり謂はゞ精神が精神を了解することゝなるのである。形態としての事物の外面的把握は自然科學の範圍のことで了解科學の關する處ではない。斯く云へば或は了解は形而上學的のものと考へられるか[2]も知れないが事實はそうではない。了解は常に經驗的所與の世界に關聯してゐるので、此點を離れて絶對精神の了解、人生觀、世界觀となれば、それは科學としての了解の限界を超越して形而上學に沒入する。了解科學は從て飽く迄、經驗的所與の世界に關聯し、而して其限り科學たり得るものである。

了解科學はリッカートの文化科學の如く普遍的概念構成を排除するものではない。然し了解科學に於ける普遍的概念の構成は自然科學のそれとは異る。自然科學に於ては諸種の對象に於ける

1) Sombart, a. a. O. S. 199-200.
2) Neurath, Empirische Soziologie, 1931, S. 56, 57.

それ自身の特色を沒却し、外面的に統一し普遍化する。眼前に一匹の馬が居る。白然科學は此個別化せる馬のみの考察に於ては、之を馬と云ふ概念に到達せしめ得ない。他の多くの馬と比較しその各々の特色を沒却(Weglassen von Merkmalen)するによつて馬なる概念を構成する。從て其結果は唯範圍のみ廣いが內容空虛な(umfangreiche, aber entleerte, inhaltsarme)諸概念が構成されるに過ぎない。處が了解科學に於ける概念構成は其普遍化たると個別化たるとを問はず、外面的把握は一切之を採らないで、意味の關聯に於て、意味の普遍或は個別を採つて概念を構成する。意味は普遍的にも把握され個別的にも把握され得る。意味は此二つの方法に於て同時に我々に經驗され得るものである。唯、然し了解科學に於ては此二つの方法には論理上先後の關係がある。普遍的意味は個別的意味に先立つ。個々のものが其特色を排棄するによつて次第に普遍に到達するのではなくて普遍が個別に先立つのである。普遍は個別よりも寧ろ內容の多い意味をもつてゐる。此普遍概念はそれ故に自然科學の普遍概念と異つて內容に卽した實在的本質概念(realistische Wesensbegriffe)である。

了解科學に於ては唯に右に述べた實在的本質概念を探求するに止まらず、更に其上位に存する理念概念(Idealbegriff)の探求をも其任務とする。實在的本質概念は其對象を謂はゞ經驗的歷史的なもの、換言すれば偶然的なものに有するが、理念概念は對象を完全な純粹性をもつて把握するもので、實在的本質概念の中に含まれた偶然性、謂はゞ本質の中に含まれた非本質的特色を排棄

して純粹無雜の姿に於て本質其ものを把握するものである。謂はば本質的特色の向上(Steigerung der Wesensmerkmale)である。此點は恰かも自然科學に於ける普遍的概念構成の過程、卽ち多くの個別的概念の中、其特色を沒却するによつて徐々に純化され普遍化されるのと甚だ似たものであるが、然し其關係する處は本質的意味に存するので、此場合個別的概念にも本質は存し、唯其純化、卽ち非本質的部分の排棄の過程が自然科學普遍概念構成の過程に外形的に類似せるに止まるものである。

## 五

了解科學の限界は上下に劃せられる。上部は形而上學と接する點に於て、卽ち絕對精神、人生觀、世界觀等には最早了解科學は進入するを得ない。下部は自然科學と接する。事物そのものゝ外面的把握には了解科學は無關係である。之は自然科學の範圍であつて、事物の意味の了解に於て初めて了解科學の範圍に入る。

抑も動植物も人類も孤立せる狀態(Einzelwesen)として科學の對象となると共に群(Gruppen)として對象となる。今後者を對象とする科學を群科學(Gruppwissenschaft)と名けると植物群科學、動物群科學、人類群科學に分類し得るが、植物群科學に於ては其群生活は單に生物學的な集團生活として取扱はれるに止まるが、動物の群生活には精神的相互交涉があり、從て生物學的取扱の他に、精神科學的考察が必要である。更に人類群科學(純粹なる社會學——動物社會學を除く)に

て於は、動物生活に於ける精神的交渉の非理念的なるに對し、理念を含む精神生活、卽ち動物の精神生活が seelisches Leben なるに對して人類のそれは Geistseelisches Leben なる特色があり人類群科學——社會學は Geistseelgruppwissenschaft である。今了解なるものが動物の精神生活にも存するものと觀るか、或は理念を有する人類の精神生活にのみ限定するかによつて、卽ち一般精神科學 allgemeine Seelwissenschaft に於て取扱はれるか、純粹な精神科學 Geistwissenschaft に於てのみ取扱はれるかによつて廣狹二つの場合が存する。[1] 乍然動物の精神生活に於ても了解が存するとするは餘りに廣きに失する。蓋し了解は既に述べたる如く事物の外面的把握ではなく、內面的本質把握であるから理念を有する精神生活、卽ち人類の精神生活にのみ存する處のものとするが妥當と思はれる。

了解が如何なるものであるかを取扱ふ學問 (Verstehenslehre) は解釋學 (Hermeneutik) とも呼ばれるが、此解釋學に於て一時期を劃したものはディルタイであり、彼によつて同じものは同じものによつてのみ了解されると云ふエンペトクレス以來の原理が明瞭にされたのであるが、然し此原理は質の方面に於てのみ妥當であつて、了解するものと了解されるものとが共通の性質を有することを基礎とするが、量の方面に於ては了解するものが了解されるものゝ全部を了解するとは云へない。太陽を見る眼が全部を開いてゐる時と半眼の時とで相違する如くである。從て量の方面に於ては了解には多くの程度が存すると云はねばならぬ。次に了解は又了解の方法によつて異

1) Stoltenberg, Diskussion über „Das Verstehen", Verhandlungen des VI Deutschen Soziologentages, 1929, S. 227–229.

る。例へば手紙を了解することには文法的了解もあり、文面の意を了解することもあり、書體を了解することもあり得る。又其手紙が商用文であるか、社交文であるか等の種類による了解もある。單なる了解と云ふことも量に於て、方法に於て諸種の差違が存するのである。[2)]

次に了解は價値判斷と無關係である。あるものゝ意味を了解するとは、その意味をありの儘に了解することであつて、其處に價値判斷とは何等の關係がない。無價値な意味、或は進んで反價値な意味を了解することがあるであらう。然しそれは了解そのものとは無關係なことである。此價値と無關係と云ふ點に恐らく了解と行爲(Handeln)との差が存するのであらうと思はれる。行爲は價値の命に從て行はれるが、了解は價値と關係なく行はれる。更に了解する意味は正しき意味に限るか、僞の意味をも了解するかゞ問題となるが、あるものゝ持つ意味が正しきか、僞であるかを判斷するものは最早論理の範圍ではない。之を判斷すべき標準は論理上の眞僞ではなく、人生に對する眞僞であつて、斯樣な深い點に觸れることは了解科學の爲し得ない處であるから、普通に了解する意味は其眞僞を問はないものと考へねばならぬ。卽ち僞の意味も、意味そのものとして眞の意味と共に了解されることゝなる。了解は意味を了解するが、然し了解されたるものが常に意味であるわけではない。けれども了解の本質は意味の了解にある。無意味な事物の了解もあるけれども、眞の了解は意味そのものを了解することにある。

## 六

2) Wach, Diskussion über "Das Verstehen", a. a. O. S. 232.

ゴットルは了解を以て人類が原始的に有する能力（urtümliche Fähigkeit）であるとする。從て小兒が食物を口に運ぶはそれが食物であることの了解があるためであり、智能の低い原始人も亦此種の了解力を有すると云ふ。其結果ゴットルによれば自然科學に於ては經驗が理論に先立ち、其前提となるが了解科學に於ては經驗は前提とはならない。[1] 了解は原始人も小兒も有する謂はゞ本能とも云ふべき能力で經驗を俟つて了解能力が發生するわけではない。從て彼によれば了解は「頭腦と心臟を以て」（mit dem Kopf und mit dem Herzen）[2] するものであり、理性と共に感情移入（Einfühlung）によつても了解は成立する。乍然了解科學の基礎たるべき了解を斯くの如く廣義に解する時は本能及び感情の如きものを含み、科學の特質たる因果性に曖昧さを伴ふことゝなる。尤も了解による因果性（Kausalität kraft Verstehen）は自然科學のそれとは異るけれども、少くともゴットルの解釋は形而上學的たるを免れない。經驗科學としての了解科學に於ては經驗を基礎とし、事物或は現象の意味を理性を以て把握するに止めねばならぬと思はれる。然らば次に自然科學の因果性に對立する意味の、了解科學の因果性は如何なるものであらうか。自然科學の因果性が大體に於て普遍化による因果性（Kausalität kraft Verallgemeinerung）であるならば了解科學のそれの特色は個別化による因果性（Kausalität kraft Individualisierung）であらう。斯く云へばリッカートの文化科學に於けるそれと同じものと考へられるであらうが、了解科學に於ける因果性は嚴密なる意義の時間的に觀た純一回限りの因果に限らない。リッカートの普遍化と個別化と

1) Gottl, Wirtschaft und Wissenschaft, 1931, Bd. I, S. 153.
2) Gottl, a. a. O. S. 157.

の差違は著しく形式主義的論理的なものであるが、了解科學のそれは實質的に觀て同じやうな經驗(嚴密に論理的に云へば同じ經驗なるものは存在しないが)略類似せる經驗に於ては前に得たる因果性が適用せられ、之に從て了解が進められる。意味の內面的把握は時間的に純一回性のもの、歷史的現象のみに限らない。マルクスの示す餘剩價値の意味はクルップ工場に於ても、フォード工場に於ても我國の各種工場に於ても把握され得る。意味のもつ深さの最極限は人格的意味であり、恐らく一回的で繰返し得ざるものであらう。乍然經驗科學としての了解科學の基礎たる了解が把握する意味は更に稀薄なる意味で、類似性の著しきものでもあり得る。英吉利の金本位停止のもつ意味と我國のそれのもつ意味とは異つたものであるが、更に此兩者の基礎に橫たわる金本位停止そのものゝ意味に於ては了解科學たる經濟學の對象として充分な因果性の下に把握され得る。

意味には具體的なものから抽象的なものに至る迄、諸種の段階があり、然もそれは斷續的ではなく、具體性を順次稀薄ならしめると云ふ意味で連續的である。從て如何なる程度迄を具體的と云ひ、抽象的とは云ひ得ない。恰かも濃度大なる色彩を漸次稀薄ならしめるが如くである。濃度大なるものは純一回的具體的なる所謂文化科學的意味であり、稀薄なるものは其普遍化抽象化に於て自然科學的意味をもつ。從て了解科學は其把握する意味が持つ具體性の程度に於て、形式的には或は文化科學に近寄り、或は自然科學に近寄る。了解科學としての經濟學は其把握する意味に

よつて或時は歴史的叙述に或時は數理派の如き形式を採る。私は了解科學を以て自然科學、歴史乃至はリッカートの中間區域等の如き區別とは全く異れるカテゴリーに屬するものと觀る。唯其本質が事象の内面的把握にあり、意味の了解にあるがため、事象の外面的把握を本質とする自然科學と實質的に對立する。從て形式的には自然科學的方法が採用せられ、數理派經濟學の如きものが成立しても猶且之を自然科學とは觀ない。數理派經濟學が數學を利用しても、それは數學に於けるが如く數式そのものゝ活躍を目的とするものではなく、數式によつて經濟的意味を把握するのである。ゾムバルトが自然科學、經濟學と了解科學經濟學とを區別し、後者のみを眞の經濟學とするが、私見によれば此區別は誤であつて、自然科學的方法を採る經濟學と文化科學的方法を採る經濟學とには形式上區別し得られるが、實質上は了解科學としての經濟學が成立し得るのみである。ゾムバルトが數理派等の經濟學を以て事象の外面的把握を以て本質とするから經濟學ではなく自然科學だとするのは見當が外れてゐる。單に數式から數式を追ふからとか圖表を用ふるとか云ふことが外面的把握であるならば、その限りに於て數學であつて經濟學ではない。乍然數理派經濟學は數式又は圖表を借つて經濟現象の意味を把握せんとするのである。數式そのものが經濟學の本質ではなく單に形式に過ぎない。外面的把握なるものが單に事物の外面のみを把握するのであれば元より經濟學は外面的把握の學問ではない。日米爲替が五十弗近くから三十弗に下つたことを數字的に示したとしても數字の低減そのものは經濟學の對象ではない。數字によつて示さ

れた爲替の下落がもつ意味が經濟學の對象たる意味であり此意味を把握する事が經濟學の任務である。外面的把握が事物の外面だけを觀察するのであれば經濟學は初めから此種の把握に於て成立し得るものではない。從てゾムバルトの云ふ自然科學的經濟學なるものは初めから存在せないものであつて之を攻擊するのは無を有と假想して假りの目標を自ら造つたに過ぎない。藁人形を自ら造り、之を斃して、得意としてゐるに等しい。唯存するは自然科學的方法を採れる經濟學であつて其實質は最初から了解科學である。內面的意味を把握することを本質とせない經濟學なるものは初めから成立し得ないものである。要するに自然科學經濟學、了解科學經濟學の區別は全く無意味であつて、方法論的には自然科學的方法を採れる經濟學、文化科學的方法を採れる經濟學の區別はあるが實質的には了解科學としての經濟學が存するのみである。

近頃カレルは自然科學を以て事象を闡明する科學であり、文化科學を以て事象を了解する科學であるとなし、更に文化科學は總て了解學ではなく、了解科學は心理現象のみを取扱ふので、文化科學の一部門であると主張する。[3] 乍然私は既述せる如く文化科學と了解科學とを同じ平面に於ける科學の分類とは觀ない。前者は方法論的意味に於て自然科學と對立せる名稱であり、後者は學問の實質に於て自然科學と對立せる區別を明示せる名稱である。方法論上に於ては了解科學は或は自然科學的であり、或は文化科學的であり得るものである。(一九二三、二、二九)

3) Carell, Wirtschaftwissenschaft als Kulturwissenschaft, 1931, S. 116-121.